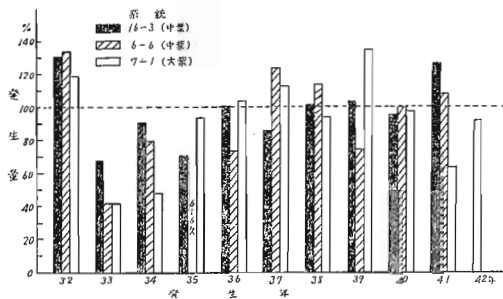


い、また大葉系統のほだ付きは中葉より降水量のやゝ少ない方が良好であるが、干ばつの被害には弱いことが観察された。

(2) 発生量と降水量との関係、乾シイタケの年度別の発生状態は第3図のとおり、33、34、35のほかは各系統とも、ほぼ平年並みの発生である。平年以上の発生を示す気象条件は第3表のとおり3～4月の日平均気温13.8℃で降水量が37～60mm(降雨日数5日前後)のときがよく発生し、秋は60mm以上ないと日々気温の低下にともない発生が望めなくなる。以上の結果からほだ付きをよくし、シイタケの収穫量を増加するには、夏季のほだ付き、発生時期の天候異変に備へ、散浸水の施設が必要であると考えられる。

第3図 乾シイタケの年度別系統別の発生量



第3表 シイタケ子実体の各年の発生と発生時期の旬別降水量(系統16-3)

発生年	平年に対する発生率	3～4月の累計		月別旬平均最少降水量	9月下旬～10月下旬の累計		月別旬平均最少降水量
		日平均	旬平均		日平均	旬平均	
		%	°C	mm	mm	°C	mm
32	131	12.5	52.4	36.4	18.0	101.7	28.1
41	127	14.3	75.9	57.0	19.1	119.7	97.3
39	104	15.1	52.3	28.8	20.3	120.2	56.4
38	102	13.3	56.4	32.1	18.2	19.4	23.6
36	101	13.8	63.5	30.9	22.1	182.0	125.2
平均		13.8	60.1	37.0	19.5	108.6	66.1
40	96	11.8	50.2	18.5	18.0	30.4	38.3
42	93	13.8	81.0	66.5	19.0	95.0	64.8
34	91	13.7	65.4	37.9	19.5	83.5	61.3
37	86	12.6	53.4	31.1	19.2	41.5	44.4
35	71	14.0	65.0	44.7	19.8	26.5	27.1
平均		13.2	64.8	39.7	19.1	55.4	47.2
33	68	13.8	63.4	50.4	19.1	101.3	51.8

104. シイタケ原木の重量減少率と含水率との関係について

林業試験場九州支場 温 水 竹 則
日 高 忠 利
久 保 田 暢 子

1. はじめに 従来シイタケ種菌接種時の含水率(乾燥程度)の見分け方は、木口の色沢、割れ目、枝条の折れ具合などの経験から判定されていたが、原木の含水率を定量的な方法により測定することができれば、含水率に大きな要因をもっと考えられるほだ付き、子実体の発生および原木の伐採時期、伐採後の乾燥期間、接種時期、またはほだ木害菌防除などの諸因子の関連性も明かとなり、伐採、接種作業およびほだ木害菌防除なども、より合理的に遂行することができるであろう。

そこでコナラ原木の生材含水率と重量減少率の時期

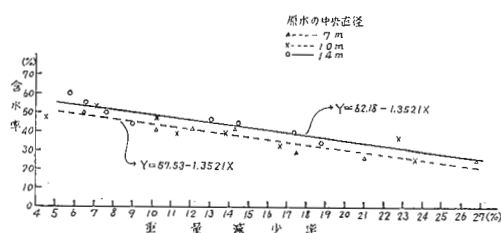
的变化について前年度報告したが、さらに重量減少率と含水率の関係についてしらべ、重量減少率によって、だいたいの含水率を推定することが明らかになったので、その結果を報告する。本試験の統計的処理について御指導援助をいただいた栗屋経営研究室長に厚くお礼を申上げる。

2. 試験の方法 18年生位のコナラを昭和41年12月14日伐採して、27日後に長さを1mに玉切り、中央径7、10、14cmの3区に分け、日照地とほだ場の日陰地におき一定期間ごとに重量減少率と含水率を求めて、これらの関係を検討した。また原木は日陰地では、直

径15cmの丸太をしき、日照地では高さ60cmの横木の上にそれぞれ一列にならべておいた。

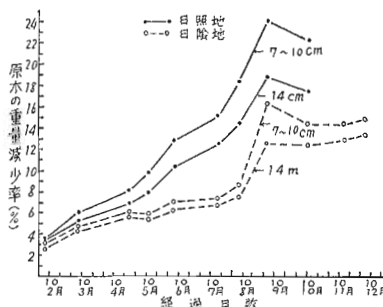
3. 結果および考察 伐木27日後に玉切りした原木の約10ヶ月間の重量減少率と含水率との関係は、第1図のとおりで、重量減少率と含水率の回帰を直径級別に求めたところ回帰係数間には差が認められなかったが、回帰定数は中央径7~10cmと14cmの間には有意差が認められた。回帰式は7~10cmと14cmの両径級について求めた。原木の含水率は重量減少率10%のとき14cmでは48.7%、7~10cmでは44.0%を示し、径級の大きい原木はより高いことがうかがわれる。

第1図 原木の重量減少率と含水率との関係



また原木の重量減少率は第2図のとおり日照地は日陰地より大きく、径級別では7~10cmの小径木が、大径木(14cm)より大きいことがわかった。これらのことから今後原木の伐採時期と乾燥期間、接種時期の栽培が合理的に行なわれ、ほだ木の害菌防除などにも役立つことが期待される。

第2図 日照地と日陰地における原木の径級別重量減少率の比較



105. 原木火焰殺菌による椎茸害菌防除試験

大分県林業試験場

千原賢次
手嶋平雄

1. はじめに

椎茸栽培において最大の障害になっているものとして、害菌の発生がある。現在では、化学的薬剤防除法、ならびに蒸溜乾燥防除法も各種行われておるが、残念ながら決定的な防除効果は期待出来ない現状である。従って本試験は、火入を行った原木林より伐採した原木は、害菌の寄生が少なくホダ付も良好であるという事実よりヒントを得て、玉切った原木を火焰殺菌すること。及び、原木に種菌を多量、接種することにより、害菌の発生を抑制することを目的として行った。

2. 試験方法

試験地(伏込場)は日田市林試内の20年生スギ林に設置した。場所は南向の平地で、多少過湿気味であり、害菌の寄生率の高い場所である。供試原木はクス

ギ15年生で42年11月下旬に伐採を行ない、43年1月下旬に1mに玉切って、2月初旬に接種し、仮伏を約2ヶ月行った後、本伏(よろい伏)にした。試験区の設定については、各処理区40本として、それに無処理区を設けた。火焰殺菌については、玉切後、焚火にて原木の表皮が全面こげ程度に焼き、種駒倍量接種区については、標準量の2倍を接種した。参考までに供試原木の含水率を知るために、玉切後に測定を行った。方法としては、径級ごとに原木を選び、中央部と末口部より辺、心材部に分けてテストピースを採り、絶乾法にて求めた。結果は第1表のとおりである。接種時の含水率としては適当と思われる。種駒は森式121号を使用した。

※(直径cm÷3)×(長さcm÷30)+1,2個=標準量